

---

\*  
唐木順三

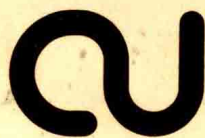
---

# 日本人の心の歴史

---

下

---



筑摩総合大学

---

\*

---

筑摩書房

---

---

\*  
唐木順三

---

# 日本人の心の歴史

下

季節美感の變遷を中心に

---



筑摩総合大学

---

---

筑摩書房

---

## 日本人の心の歴史 下

唐木順三  
からきじゆんぞう

1904年長野縣に生まれる。1927年  
京都大學哲學科卒。評論家。主著  
「鷗外の精神」「中世の文學」「千利  
休」「無用者の系譜」「無常」「三木  
清」「日本の心」他。尙「唐木順三  
全集」全12巻がある。

---

昭和45年8月25日 初版第1刷發行



著者 ©唐 木 順 三  
發行者 竹 之 内 靜 雄  
發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町2-8  
Tel (291) 7651 振替東京 4123  
郵便番號 101-91

---

印刷 精興社 製本 永興舎

(分類)1321 (製品)03212 (出版社)4604

目次

一 西鶴の登場——中世から近世へ……………七

正宗白鳥の西鶴論 雪月花の色里化 新しい偶像、太夫  
浮世之介 町人の限界 古典の俳諧化、庶民化 『犬筑  
波』 『閑吟集』 一休における中世と近世 自己告白禪  
憂世から浮世へ 西山宗因 西鶴の『日本永代藏』 西  
鶴における季節

二 禪から儒へ……………五

宋學、朱子學の性格 佛、道、儒の折衷 太極圖說 道  
元の三教一致批判 宋代の士大夫禪、五山制度 大應、大  
燈、關山、夢窓 剃髮の俗人 詩僧、儒僧 五山僧の功  
罪 權力と佛道 聖（ひじり） 徳川政權の思想統制 藤原惺窩  
體系の學としての朱子學 御用化

三 義理と人情……………六

くるわ 忘八 人情 伊藤仁齋の仁愛說 近松におけ

る義理と人情

#### 四 道 行

『天の網島』『曾根崎心中』の場合 『淨瑠璃姫物語』 古今  
源氏、また季節の景物の裝飾化、模様化 十二單衣姿 浮  
世繪の遊女姿 近松の道行の魅力 安土桃山時代、徳川時  
代における裝飾過多の傾向 人間中心、政治中心の時代  
鎖國による萎縮 藝術また季節のくるわ化

#### 五 擬 古

『假名性理』の美文調の序 擬古の文體を作つた心理と時代意  
識 小堀遠州の迎合 澤庵と將軍家光 桂離宮の改造部  
分の裝飾過多 絶對政權下の藝術家の頹廢 本居宣長の擬  
古の對象 古道の體現 道とは何か 儒學の作爲 人  
智の有限の自覺 まごころ 「後の世」のつくりごと  
ものまなびの道 もののあはれ 人のまことの情 一種  
の自然主義 古事記の神ながらは宣長の理想、當爲 宣長  
の散文が論理的、合理的であること まごころ、もののは  
れの内容と論證的態度との矛盾 宣長の弱點 歌論、作歌  
論と實作 擬古的精神の制限 徂徠と宣長

六 風雅から實證へ……………一七四

儒風の三變 文人氣質 南郭、蕪村、抱一、鵬齋、南畝等  
徳川中末期における隨筆の流行 池大雅 文人氣質の否定  
態としての藩校 明治の藩閥政府下の文人、柳北、枕山、荷  
風、漱石 雅號の喪失 文人氣質に抵抗した實證主義、  
『蘭學事始』 昌益の『自然眞營道』 司馬江漢の寫眞論  
福澤諭吉の實學 附記、安藤廣重の雨と雪

七 外國人の見た日本の風光・風物……………一七五

擬制、擬裝から事實へ ゴンチャロフの記述と世界情勢  
ベルリ、ハリス ハーンの本觀、風土と人間 無常感と  
自然美 モラエス、綠の國 タウト、自然の中の人間  
フレージャー、自然の小撰集としての庭 コラール、植物的文  
化

八 東洋的なものと西洋的なものとの葛藤と融和……………一七六

漱石の場合、文學とは何かの問題、外發的文化と自己本位  
鷗外の場合、二本足の學者 内村鑑三の場合、クリスチャン・  
サムライ 西田幾多郎の場合、道と學 明治と大正の相違

阿部次郎の「あれもこれも」、世界人 和辻哲郎の日本文化  
の重層性、解釋學 「白樺派」の人類と個性 芥川龍之介  
の不安

九 寫 生……………三六

自然や季節と疎遠になつた徳川時代 明治二十年までは實學、  
歐化の時代 「疾風怒濤」の二十年代、新しい詩心、北村透  
谷 散文詩の出現、蘆花の『自然と人生』と獨歩の『武藏野』、  
自然の復活 長塚節の寫生、「余は天然を酷愛す」、「土」、  
「自然・自己一元の生」

一〇 現代文明下の自然・季節……………三九

美の終焉 春は來た、どこに來た 志賀重昂の『日本風景  
論』、江山洵美 自然・人心の荒廢の原因、近代の合理主義、  
科學技術文明、經濟優先 現代批判、森有正の「もの」、前  
田俊彦の「つくる」 造化とは何か、人間の有限性の自覺

あとがき

索引

日本人の心の歴史

下

季節美感の變遷を中心に



一 西鶴の登場——中世から近世へ——

正宗白鳥の西鶴論 雪月花の色里化 新しい偶像、  
太夫 浮世之介 町人の限界 古典の俳諧化、  
庶民化 『大筑波』 『閑吟集』 一休における中  
世と近世 自己告白禪 憂世から浮世へ 西山  
宗因 西鶴の『日本永代藏』 西鶴における季節

西鶴の登場

正宗白鳥は昭和二年に『西鶴について』を書いてゐる。その中からやや長い引用をする。  
「——くらべ物無き富士の雪も是れはとながめたばかりなり。吉野の花も夜までは見られず、姨捨山の月も世間に變つて毛が生えてもなし。是れを思ふに、人間遊山の上盛りは色里に増すことなし（『好色二代男』）——といふやうな、遊廓讚美の作者（西鶴）の感想は隨所に挿まれてゐるが、日本古來の風流の目標とされて、芭蕉の如きはそれに同化することを自己修養の極致として

るた雪月花も、西鶴によつては、ただ性慾に味ひを加へる香料とされてゐた。——しばらくして扇に心を付け、この袖笠の公家は、佐野の渡りの雪の夕暮で御座んすかなどと問ふより、『好色一代女』——、雪の夕暮から『袖打拂ふ雪の肌に』と、痴話が轉じて國家禁制の描寫となるのである。芭蕉などの見地から見ると、西鶴の好色本は、雪月花の神聖を冒瀆してゐるのだ。

右のうち、『二代男』の「誓紙は異見の種」からの引用、「人間遊山の上盛りは色里に増すこと無し」のつづきが面白いから、寫してみよう。

「此道に身を染め、八宗兼學、女色一遍上人の勸めに、女郎買はそもそもより大夫に懸るが善し。子細は、又上も無き職なれば、限りを知つて留まる事早し」云々。

白鳥の右の文章に補説をしてゆけば、ほぼ井原西鶴なる浮世草紙（草子）作者の特質や、文學史における位置を明らかにすることができよう。

ここでは富士の雪、吉野の花、姨捨の月といふ萬葉以來、赤人、西行、また芭蕉によつて代表的にうたはれてきた風雅の種が、みるも無慘にパロディ化されてゐる。また當時まで歌の聖とされてゐた定家の「駒とめて袖打はらふかげもなしさのわたりの雪の夕暮」も女郎の客を引く手練口説の道具に利用されてゐる。かういふ例は西鶴の好色本のいたるところにある。それが「浮世草紙」の浮世草紙たる所以といつてもよい。

山口剛氏はその好著『近世小説』（創元選書、昭和十六年）の上巻で、「西鶴の人生に對する見解はすべて『一代男』に決定してゐる。視野はすでに限定されて、後のものは、つきつきに視點をかへるに過ぎない」といつてゐる。『一代男』は西鶴の好色本の第一作で、天和二年（一六八二）に版になつたもの、この時、西鶴は四十一歳であつた。ところでこの『一代男』は主人公世之介の七歳から六十歳に至る五十四年間の好色生活を八卷五十四章に綴つたもの。この五十四といふ數は意識して『源氏物語』の五十四帖に合したもので、山口氏は、これは「源氏物語の俳諧化」であり、「世之介とは源氏の君のやつし姿であつた」といつてゐる。浮世草紙の第一作であると同時に、浮世草紙の性格を決定した『一代男』が、そもそもから源氏物語の俳諧化であつたわけである。この場合、俳諧化とは、さきになつたパロディ化を指す。

『一代男』卷六の「全盛歌書羽織」の最初のところを寫す。

「男は本奥嶋の時花出はやりで、女郎も衣装つきしやれて、墨繪に源氏、紋所もんどころもちひさくならべて、袖口も黒く、裾も山道に取ぞかしとと（中略）。世之介初雪のあした、紙子羽織れうききはめに了佐極てかがみの手鑑、定家の歌切うたぎれ、頼政が三首物、素性法師の長歌、其多世々のうた人の筆の跡をつがせて、是を着る事身の程うらしらずもつたいなし。尾州の傳七も傾城二十三人の誓紙をつぎ集め、是も羽織にして互に男ぶりをあらそひ、野秋（太夫）にあひそめ、兩方すれ者、後は金銀の沙汰にもあらず、命あぶなし。」

定家や頼政、素性の歌切も、ここでは傾城二十三人の誓紙と同格な扱ひである。

同じく卷七の「さす盃は百二十里」は、「露の時雨に兩袖をぬれの開山、高雄（嶋原の太夫）が女郎盛（ざぶり）を見んと、紅葉かさねの旅衣、八人肩の大乗物、五人の太鼓持、ぱつとしたる出立（いで立ち）に陰陽の神ものりうつり給ひて、世に有程（あるほど）のわけしり男、夜やり日やりに行けば、宇津の山邊にのぼり詰（つめ）、嶋原への傳手（つて）がなとおもふ所に云々」で始められてゐる。ここでもぢりの對象とされてゐるのは伊勢物語の九節の、業平のあづまくだりのところ、駿河の國、宇津のほとりをしるした文である。「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」の有名歌が、「嶋原への傳手」がないものかといふやうにもぢられてゐるわけである。

源氏、伊勢、貫之、定家、西行、それに一遍から兼好、また利休、芭蕉にいたるまで、西鶴のパロディの好資料になつてゐる。彼は好んで聖なる偶像をもとめ、それを俳諧化し、當世化して、やにさがつてゐる。舊來の偶像を破壊するとともに、新しい偶像をつくりあげるために、さまざまな工夫をしてゐる。西鶴のつくりあげた偶像の二三を誌す。

『一代男』卷五には、吉野太夫のことがでてくる。「都をば花なき里になしにけり吉野は死出の山にうつして」とうたはれたこの太夫は、「琴彈（ことば）、歌をよみ、茶はしほらしくたてなし、花は生替（いけか）、土圭（とけい）（時計）を仕懸（しかけ）なをし、娘子達の髪をなで付（つけ）、碁のお相手になり、笙（ふえ）を吹（ふ）、無常咄（むじやうばなし）、内證（ないしやう）事（こと）、萬人さまの氣をとる事ぞかし。勝手に入れば呼出し、吉野獨（ひひとり）のもてなしに座中立時（たちどき）を忘れ」云々。

嶋原の高橋といふ太夫についての記述。これは初雪の朝の世之介を正客としての壺の口きり

(爐びらきの茶會)の様子である。

「高橋其日の装束は、下に紅梅、上には白縹子しろじゆすに三番叟の縫紋、萌黄の薄衣うすぎぬに紅の唐房からふさをつけ、尾長鳥のちらし形、髮ちご額ひたひにして金の平髻ひらもとゆりを懸て、其時の風情あまつ天津乙女の妹などと是をいふべし。手前てまへのしほらしさ、千野利休も此人に生れ替られしかと疑はれ侍る。

ことすぎて跡はやつして亂れ酒、いつにかはりてのなぐさみ、酔のまぎれに世之介、金銭銀錢紙入かひいれより打明うちあけて兩の手にすくひながら、『太夫戴いたけ、やらう』といふ。此中では戴かれぬ所ぞかし。初心なる女郎は脇から赤面してゐられしに、高橋しとやかに打笑ひ、『いかにも戴きます』と、そばにありし丸盆まるひんに請うかて、『今日の前でいただくも、内證うちしょうにて狀(手紙)で戴くも同じ事』と申して、禿かぶろを呼びよせ、『なふて叶かなはぬ物じや。取ておけ』と申されし。其見事さ、いつの世か又有あべし』(卷七、「其面影は雪むかし」)。

西鶴の新しく樹立した偶像が、二百年の後にもなほ偶像として通用してゐた證據として、森鷗外が『細木香以』(大正六年)の中で書いてゐる一挿話をしるしておく。ちなみにいへば細木香以は明治四年の秋、「己れにも厭あきての上か破芭蕉やればせう」を絶筆としてこの世を去つた大盡だいじんの大通人であつた。

「父が北千住に居つた時(明治十三年—二十五年)、家に一婢があつた。肥白にして愛想好く、擧止も亦都雅であつた。然るに此婢の言ふ所は、一々わたくし共兄弟姉妹の耳を驚かした。婢は幼いとけなくして吉原の大籠おほまがきに事へ、忠實を以て稱せられてゐた。その千住の親里おやさとに歸つたのは、年二十を

躑こえた後である。婢は『おいらん』（太夫）を以て人間の最尊貴なるものとしてゐる。公侯伯子男の華族さんも、大臣次官の官員さんも、婢がためには皆野暮やぼなお客である。貸座敷の高樓大厦と其中にある奴婢ひなび臧獲ざうくわくとは、おいらんを奉承し裝飾する所以の具で、貸座敷の主人はいかに色を壯にし威を振ふとも此等の雜輩の長たるものに過ぎない。婢の思量感懐は悉くおいらんを中心として發動してゐる。婢の目を以て視れば、吉原は文、吉原以外は野、吉原は華、吉原以外は夷である。それは吉原がおいらんのいますレジダンスだからである。」

右にいふ「人間の最尊貴なるもの」としてのおいらんをつくりだしたのが、初期の傾城町、殊に吉原であつたことは歴史家によつても實證されてゐる。坂田吉雄氏はその『町人』の中で次のやうに書いてゐる。

「遊女に等級を設け、最上級の太夫には當時の女性としての最高級の教養を授け、樓主にもまさる權威を與へたことは、業者の賢明な營業政策であつた。そのために色欲が象徴化され、藝術化され、單なる色欲を超出して、『吉原』はあらゆる階級に對する魅力となることができ、従つてまた金錢を超えたものとして金錢を濫費せしめることができたのである。『洞房語園』によれば、『慶長元和の頃は歴々の御方も兼日約束けんじつにて、いづれの日には誰が家何といふ太夫が手前にて茶の會に參るなどとして心易き同士は誘引し合ひ、『吉原開基の砌より寛永年中まで吉原町の役目として御評定所へ太夫遊女三人宛御給仕に上』つたといふ。太夫は俗にいふ『大名道具』であつた。諸大名が彼等のために千金を投じて惜まなかつたことはいふ迄もない。」

「色欲の象徴化、藝術化」といふことは、凡そ至難なわざである。象徴化したり藝術化したりすることのできないものが、凡そ色欲といふ、生物的、本能的なものであらう。色をひさぐ色町が、色を超出しようと計る、或ひは超出してゐるやうな扮飾をし、その計らひや扮飾を、計らひや扮飾のままに、それと知りながら受納し、野暮なことはいはないといふところに、色道の世界が現出或ひは幻出した。それが江戸期の遊里中心の文化であつた。色欲の世界にあつて色欲を藝術化さうと企て、色を金銭でひさぎながら、金銀臭を超出しようとする。それがいはゆる遊女と傾城買ひとの間に生れてきた「意氣」「いき」「粹」「はり」また「通」といふ理念であつた。大臣（大盡）の大通と、名のあるおいらんまた太夫との間の「遊び」が即ちそれを代表的に示してゐるものではあつたが、さういふ「遊び方」が、遊里の理念として、一夜の主客の間にも通用した。「吉原は文、吉原以外は野、吉原は華、吉原以外は夷」と鷗外に語つた一人の婢の言葉、「吉原はおいらんのいますレジダンス」といふ言葉は、江戸の遊里中心の文化の名残といつてよい。

「色欲の象徴化、藝術化」を至難のわざといつたが、この至難なわざが、いはゆる浮世繪のすぐれたものの中に、ある程度に具現されてゐる。浮世繪はまさに浮世繪なるが故に、春畫、祕畫、あぶな繪と同一の範疇に屬しながら、その美しいものは野暮を超えてゐる。直接的であるよりほかにないものとされてゐる色の世界を、いはゆる色道にまで高めようとしたことは、これもまた日本の、殊に江戸期の文化の、類稀れな特色といつてよいだらう。

太夫は遊里の花、遊里の文の代表、女王であつたとしても、畢竟は金錢をもつて買ひうるものであつた。太夫を買ふためには金錢をためねばならぬ。そして貯めた金を悔なく浪費濫費しなければならぬ。これは俸祿や扶持を生活のたづきとする武士にはかなはぬことである。百姓からの年貢で生活する地主豪農にも限りがあつてかなはぬことである。何萬石何十萬石の祿高の大名にも長つづきのできるものではない。將軍さまでも良貨を悪貨に改鑄して、一時をしのぐことぐらゐしかできない。遊里が町人の幅をきかす場所であつたことは、遊里の理念からしても當然であつた。西鶴のいはゆる「町人物」の第一作『日本永代藏』（貞享五年△元祿元年、一六八八）の冒頭に、「世に有程あるほどの願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天あめが下に五つ有あり。それより外はなかりき。是にましたる寶船の有るべきや」と書かれてゐる。岩波古典大系本ではこの「五つ」を生、老、病、死の四苦に、政治權力を加へたものであらうと註釋してゐるが、五つが特別の意味をもつものではない。人間萬事金の世の中で、金銀で始末できないものは世の中にないといふのが趣旨であらう。色戀沙汰などいふまでもない。

『好色一代男』の世之介は、替名かへなを夢介と呼ばれた富豪を父とし、高名な遊女を母として生れてゐる。七歳のときから漁色を始め、江戸での亂行が父の怒りを買つて勘當され、放浪と好色の生活をつづけたが、三十四歳のとき父親が死んで、貳萬五千貫目の遺産を貰ふ。「日來ひじょうの願ひ今也。おもふ者を請出まうだし、又は名だかき女郎のこらず此時買かはいではと、弓矢八幡百二十末社共を集あつめて大大じんとぞ申ける」と、その時のことを西鶴は寫してゐる。三十四歳以後六十歳で女護が島